

白選五十首



日高堯子

ひたか・たかこ 1945年、千葉県生まれ。'79年に「かりん」入会、歌をつくり始める。現在「かりん」編集委員。エッセイ集に『山上のコスモロジー 前登志夫論』『黒髪考、そして女歌のために』。第五歌集『樹雨』で日本歌人クラブ賞、河野愛子賞受賞。

草の上に生れしものを螢ほうつると呼ばへば千年の闇くづれけり

声もたぬ虫にまじりて地に這へば草のくらやみかぎりもあらぬ

野草一束朝靄二合精霊すだま三つ収めて伏せよふるさとの壺

しもつけ草の紅ほろほろとかなしきを更級日記の少女も見しや

初夏の陽に青みてうかぶ種痘あとわれを創りし父母かなし

さびしさにうそりうそりと増える髪肩に垂らして森のごとをり

つばなの野あまりあかるく光るゆゑこの世の伴侶はだれにてもよし

あつさりと夫を忘れて眠りけり ねむりは月の黄河を溯のぼる

支那服を選びるんきみにほつとりとともれるわれの身体あはれ

〈遠人愛〉といひしはニーチェ ひとを恋ふ心は思想のやうには死なず

雨後の月にほひ出づるよゆつくりと体たいをひろげて川海に入る

『野の扉』

『牡鹿の角の』

今年はずい夏であった。関東では七月になる前から早々と梅雨が明け、晴天がつづいた。くる日もくる日も真つ青な空に雲が湧わかき、太陽の光がきらつき、蟬せみの声がじりじりとにじむ。まさに金色の真夏の天地であった。そしてその金色の夏の景色は、何故なぜかしきりに幼年時代の夏を思い出させた。

房総半島の山村に生まれたわたしにとって、夏の記憶といえは蟬と茅かやと山百合やまゆりである。夏の朝、目が覚めたわたしがまっ先にするのは、家の周りに新しく張られた蜘蛛くもの巣を探すことだった。蜘蛛の巣をみつけたら、素早く竹たけ竿ざんの先につけた輪かからめとる。巣がらみといて、蜘蛛の巣の粘りで蟬をとる網をつくるのだ。網を強くするためにはいくつも蜘蛛

さくら山よしやよしのの幻のひとつか彼のあはき体温

わが内部を出でゆかぬ彼は誰なるかりルケを読めばリルケとなりて
来よといふ声の鼻音ぞやさしくて受話器を投げて月下を出づる

音楽よりふかく近づく彼の脚のブルージーンズ藍のむらぎえ

ししくしろとふ舌のしびるる枕詞美しにかかる黄泉にもかかる

しらとほ にひはりを過ぎ身のどこかやはらかなればきみの生国

ひぬまなる水のそこひの黒しじみをんなどおもふこの黒しじみ

東北がひとりの男神とみゆるまで林檎の白き花なかを行く

ああ呷ししうどさむく咲きさかりさびしきまでに海にまみるる

夏の蛇水盤のへりに喉をおき時やはらかに水呑みてをり

幾月のぬばたまふかき海の青びび びびとゆくとんぼ千匹

からすうりのレースの花がしゆつとひらき こんなにしづか地上の時間

蝶番の真似などしたるわが夫のなんの心か今朝みづみづと

黒百合の根ひとつ食べて毛先までつめたかりける夜なり 逢はむ

人間を直立した蛇だといふ なにかうれしく空みてわらふ

この母の身体のなかにわたくしが満ちてゐた日の黒潮の音

玉蜻蛾のしろひげがふと伸びてしづかキーツ・ハウスのキーツ

青秋や まだ何ものも身ごもらぬすすしきマリアがわれを過りぬ

野にて逢ふ十字架ありてキリストを昼顔のはなが巻きしめてをり

血はすぐにかたまり乾き そののちのユダヤ人街に絵葉書を買ふ

「幾月もゆら」

「玉虫草子」

の巣がいる。しかも新鮮な巣でない粘りが弱い。古い巣はだめなのである。だから子供らは競って早起きして蜘蛛の巣を探す。寝坊して蜘蛛の巣をみんな取られてしまった朝は、ひどく悔しかったものだ。

房総の夏の山野には茅が繁り、山百合が強烈な香を放っていた。大きな野性的な山百合の姿は、花というよりむしろ生き物という感じがしたが、その傍らにわたしは一人目がな寝転んで飽くことがなかった。かすかな風の音と虫たちのたてる音しかない夏の天地。その中にいる心地よさはいまだに身体の内に残っている。わたしが歌をつくる時、とくに草木を歌う時には、その無音の天地にはまっていた感覚があらわれるらしい。草木とけ合う身体、自我意識の薄さなどと評されるところだが、そんなに自覚的なものでもない。

——花の色が深いのも、昆虫の紋が美しいのも、ただ単に種族保存のためといつては説明がつかない。蜂や蝶は花の色を鑑賞することとはできないが、人間にはその美しさが大切であるからだ。だからむしろ、花の美しさは地球の春をかざるため、人間の脳や神経をやらわげられるため——という説を読んだことがある。わたしの歌も、一つの花、一匹の虫の無心の力と同じに、地球の春をかざるための行為、と思えば、いくばくか心やすらぐ。

たましひが躰のなかで泪するしづかにひととき泣かせてやりぬ
空豆のくぼみのやうな姉として疲勞つかれのふかき弟おもふ

地上いま雨がさがりぬ 樹の根くぐる地下水脈に虹立ちをらむ

ひとのいくさのほとりに生きて今朝ひら咲くかたびらいろの露のつきくさ

水を吐き水を吐きつつ地中よりのぼつてきたり蟬は鳴くため

巨いなる卵を空に生むこちそこいらちゆうの山が笑へば

この春はちぢむ乳房のをかしくもかるき心となりて梅見る

ああなにかとぐるを巻けるかなしみが夜の故宮にしづんでるたり

桃明かり千年ひとのゆめをみてまた人間によみがへりこむ

人が人の臓器をもらひ生きる日の身体のはきは影かさねあふ

ふと洩るる父の躰たよりふかぶかと腐葉土のやうに湿れる時間ときが

「樹雨」

老いた母 太肉ふとじしの母 若き母かさなりて呼ぶ ごはんにしましよ

マスカット房の重さは手に受けてふつさりと切るねむる果肉を

虹のごとよみがへりくる画のなかに妹が姉の乳首をつまむ

くぼみには白き卵をのせるべしああやはらかき秋の身体

髪を洗へば何をか待つやうなこころひからせ樹雨きさめがにほふ

咄しをはりどろりとそこに咄家の皮のやうなる黒羽織のこる

処刑具に菫の花の彫りてありしロンドンの曇る秋の日に見し

年ナチユルごとに自然になつてゆく妻をしづかに遠ざけて夫も老ゆ